

遼西地方における鮮卑墓出土土器の観察

金田 明大

1 はじめに

西晋末の永嘉の乱(311～316)の後、中国大陸は五胡十六国時代と称される多民族が興亡する期間に突入する。中国東北部においては、鮮卑族が慕容、拓跋、宇文、段などの各部に分かれつつ勢力を伸張した。遼寧地域を根拠地とした慕容氏やその後を継いだ馮氏は、一時期中原にも進出し、前燕、後燕、北燕のいわゆる三燕諸国や、西燕、南燕という政権を樹立した。

342年の前燕による丸都城攻略と高句麗の臣従、後燕末の高氏の擁立等、この地域は隣接する高句麗との関係が深く、中国大陸と朝鮮半島との文化の接点としての役割を果たしてきた(岡崎1989、礪波・武田1997)。

彼らの残した墳墓出土の副葬品の中には、日本列島から出土する考古資料の中に、強い関連性を持つものが存在し、年代の併行関係と共に文化的な影響が注目されてきた(例えば穴沢・馬目1973、1984、徐1995、桃崎1999、藤井2003)。穴沢・馬目両氏が指摘するように、この地域の資料の蓄積が日本列島および朝鮮半島の考古学にあたえる影響は大きい。

反面、土器については、直接的な関連を見出すことは難しい。既に馮素弗墓等の暦年代決定が可能な墳墓の存在により出土資料の比較が達成可能となっている。現状では考古資料による時間軸の設定にどれだけの意義があるか、という疑問は当然存在するだろう。しかし、互いの研究成果を共有していくには、暦年代を直接考えることが可能な資料だけでなく、比較検討が可能な資料を増やし、対象となる地域の時間軸を構築することによって、研究を進展させることも必要であろう。この観点から、土器の研究も意味をもつと考える。

本共同研究において、論者は主に遼西地方、特に大凌河流域の出土資料を観察する機会を得た。本稿ではこの資料の観察の報告と、若干の検討をおこなうこととしたい。

鮮卑遺跡出土土器に対する研究は、宿白氏の鮮卑遺跡の研究(宿1977)等があげられるが、当該地域においては田立坤氏の研究が注目される(田1991)。田氏は墳墓の形状や、土器を材質、器形により分類してその変遷をまとめている。これによると、後漢末より三燕の時期までは大きく3段階に分類することができ、それを史書にみられる鮮卑各部の動きと関連付けて説明されている。土器の編年図が提示され、その変遷が明らかになったことは特筆すべきであろう。これらの成果を参考にしながら、実際の資料を観察することとする。

2 用語について

資料の紹介の前に、若干の用語の整理をおこないたい。個々の名称は日本と中国の呼称に差があり、また研究者によっても異なるため、ここでは以下の名称で記載を進める。

2-1 焼成

当該期の土器に見られる焼成は、酸化炎により、軟質に焼きあがる軟質土器と、焼成の最終段階で還元炎を用い、黒灰色を呈する瓦質土器(中国では主に灰陶と呼称される)、焼き締められて硬質ではあるが明赤褐色を呈する赤焼土器がある。これに、瓷器が加わる。瓷器は緑茶色、赤褐色の釉をかけたものであり、搬入品の可能性が高い。

2-2 器種

墳墓に副葬された器種の内、主なものとして、罐、長頸壺、短頸壺、小口壺、奩をあげることができる。

罐：短く外反する口縁部と筒状の胴部をもつものである。

長頸壺：長い口縁部と胴部をもつものである。墳墓出土資料の中でもっとも一般的な器種である。

短頸壺：短い口縁部と丸みを帯びた胴部をもつものである。

小口壺：丸みを帯びた胴部に、短く径の小さな口縁部をもつものである。

奩：筒状の断面台形状を呈するものである。

その他の器種として、坏、皿、鉢、甕といった供膳具、調理具、貯蔵具や熨斗といった明器がある。また、細い頸部から口縁部が大きく広がる細頸壺が認められるが、類例から時代の降る北魏時代のものとする。北魏拓跋部の遼西への進出と関連する可能性が高いこの器種の出現も大きな変化である。

2-3 装飾

土器の装飾としては、まず暗文が目される。これはミガキ調整を規則的に施したものである。暗文の幅は1mm以下の細線のもの、2mm～3mmの太線のものがある。施文は以下のものが主となる。

縦位単線暗文：間隔を開けて縦方向に単線を施すもの(図版22-1)。

縦位複線暗文：縦方向に数本の線を一まとまりとして施すもの。

横位単線暗文：横方向に単線を施すもの。

扇状暗文：扇状に上部で複数の線を収束させるもの。

格子状暗文：格子状に単線を施すもの(図版22-2)。

また、胴部に印文をつけるものもある(図版22-3)。主に胴部に施文される。内面に当具の痕跡がなく、施文による器体の変形を伴わないことからタタキ技法によるものではない。装飾として模様を入れた工具を押捺したものであろう。

3 遼西地域出土土器資料

実際に図示が可能な出土資料は38点にのぼる。但し、まとまりを欠くものもあるので、ここでは、その中から33点の資料について概要を記す。

3-1 十二台M9022出土土器(図1-1~3、図版20-1: 尚1997)

罐(1) 厚手で口縁部は水平に伸び、肥厚する。有軸回転台を用いた痕跡は観察できない。

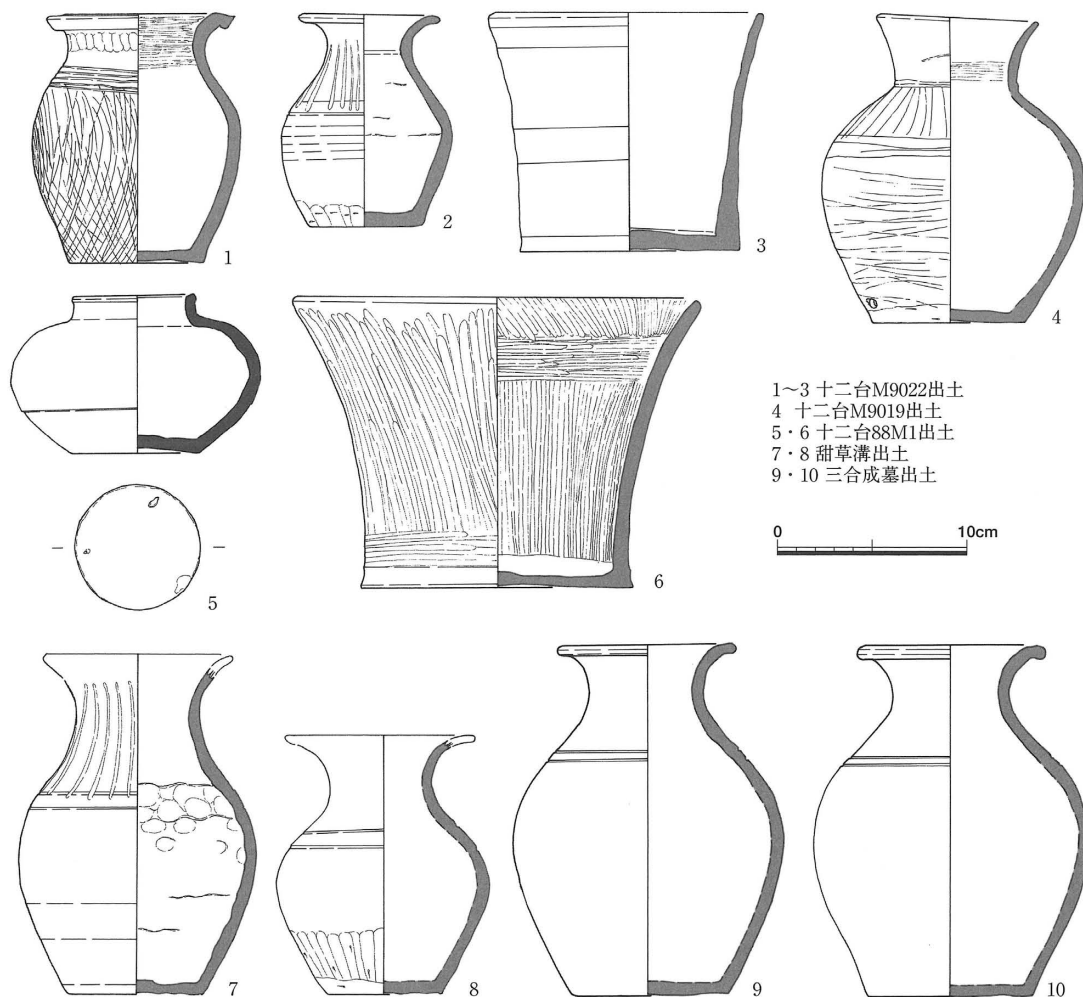


図1 鮮卑墓出土土器(1) s=1/4

器高13.2cm、口径10.0cm、底径7.1cm。軟質。褐色。

全体を横位ナデで調整し、頸部に縦位ナデをおこなう。胴部上半に不整な沈線を4～5条廻らせるが、全周はしない雑なものである。続いて胴部に細い格子状暗文を施すが、方向が揃わない粗雑なものである。口縁部内面はナデ後、横位のミガキをおこなう。

長頸壺(2) 口縁部が水平に外反するもの。器高11.4cm、口径7.5cm、底径6.5cm。瓦質。黒灰色。

胴部は回転ナデをおこなう。特に下半部は強くナデをおこなう部分がある。胴部最大部のやや上に沈線を一重全周させている。胴部最下部は面取り上に横方向のケズリをおこなう。続いて胴部上半部から頸部に掛けて太い縦位単線暗文を下から上へ施文する。胴部内面は下半部を回転ナデ、上半部に不整方向のナデをおこなうが、輪積痕跡が残存する。口縁部内面は回転ナデをおこなう。

壺(3) 平底の底部からやや外反して開く器形をもつ。器高13.3cm、口径14.7cm、底径11.7cm。瓦質。暗灰色。

底部外面の中心に回転台の痕跡を残す未調整部分がある以外は内外面ともに回転ナデを用いている。五本の全周する細い沈線をもつ。

3-2 十二台M9019出土土器(図1-4、図版20-1：尚1997)

長頸壺(4) 口縁部は短く、やや外反気味に広がる。胴部と頸部の接合部分に粘土紐を一重回し、補強をおこなっている。器高16.4cm、口径8.6cm、底径8.0cm。瓦質。暗灰色。

口縁部及び胴部は回転ナデで調整をおこない、胴部最下部は横方向に面取りするように静止ヘラケズリをおこなう。底部は静止ヘラケズリ。続いて胴部上半に沈線を3～5条廻らせるが、いずれも全周しない雑なものである。その後、肩部は細い縦位単線暗文を下から上へ、胴部は細い横位単線暗文を粗雑に施文する。

3-3 十二台88M1出土土器(図1-5・6、図版20-1：張・田・孫1997)

壺(5) ややつぶれた球胴に直立する口縁部をもつ。器高8.4cm、口径6.5cm、底径6.6cm。瓷器。素地は赤褐色で、やや茶がかった緑色釉をかける。

釉のため、調整の詳細は明らかでないが、胴部上半は回転ナデ、下半は回転ケズリであろう。内面は回転ナデで、底部は施釉されていない。なお、この底部内面に三叉トチンの目跡が存在しており、小型品を中に入れて二次焼成した痕跡であろう。底部外面にも三叉トチンの目跡が残存する。

壺(6) 平底の底部からやや外反して開く器形をもつ。器高15.5cm、口径21.6cm、底径14.5cm。瓦質。暗灰色。

内外面ともに回転ナデをおこない、下から上への太い縦方向のミガキをおこなう。その後、

胴下半部の一部に横方向のミガキをおこなう。内面も下から上への太い縦方向のミガキをおこなった後、上半部の一部に横方向のミガキをおこなう。更にその上位はやや斜め方向にミガキをおこなう。このミガキは、下半部のミガキと一連のものと考えられるものの上に別途おこなっていることが確認できる。

3-4 三合成墓出土土器(図1-7・8、図版20-3：于1997)

長頸壺(7) 口縁部を欠失する。残高17.2cm、底径7.1cm。瓦質。暗灰色。

口縁部及び胴部は回転ナデで調整をおこない、胴部最下部を横方向に静止ヘラケズリをおこなう。底部は未調整で回転台の痕跡を残す。胴部上半に2条の沈線を全周させ、続いて胴部上半部から頸部にかけて太い縦位単線暗文を下から上へ施文する。胴部内面は輪積痕跡を残しており、上半部は指頭圧痕が明瞭に認められる。頸部は横方向のナデ。

長頸壺(8) 口縁部を欠失する。残高13.4cm、底径6.2cm。瓦質。暗灰色。

口縁部及び胴部は回転ナデで調整をおこない、胴部下半部は縦方向に面取りするように下から上の方向に静止ヘラケズリをおこない、更に最下部を横方向に静止ヘラケズリをおこなう。底部は未調整で回転台の痕跡を残す。胴部上半に2条の沈線を全周させる。

3-5 甜草溝出土土器(図1-9・10、図版20-2：王・万・張1997)

長頸壺(9) 口縁部が水平になるまで外反する。器高18.8cm、口径9.4cm、底径8.4cm。瓦質。暗灰色。

底部外面を静止ヘラケズリする以外は、内外面を回転ナデで調整する。胴部上半に2条の沈線を全周させる。

長頸壺(10) 口縁部が水平になるまで外反する。器高18.5cm、口径9.9cm、底部8.8cm。瓦質。暗灰色。9と特徴が共通する。

3-6 袁台子壁画墓出土土器(図2-11~18、図版16-1・2：李1984)

坏(11) 半球状の形状で、口縁部がやや外反する。底部は貼り付け高台。器高5.6cm、口径15.7cm、高台径8.6cm。瓷器。素地は赤褐色で、全体に醬釉をかける。

胴部外面は上半部を回転ナデし、特に口縁部は強いナデをおこない、やや外反させる。下半部は回転ヘラケズリをおこなう。内面は回転ナデであるが、底部からの立ち上がりの部分に成形時に強いナデをおこない、段が付く。底部内外面とも、三叉トチンの目跡がある(図版22-4)。底部外面は突出し、その周囲に貼り付け高台を付ける。

坏(12) 平底で半球状の形状をもつ小型のものである。器高3.8cm、口径10.0cm、底径5.5cm。瓷器。素地は赤褐色で、全体にやや茶がかった緑色釉をかける。

胴部外面上半は回転ナデで、下半部は回転ケズリである。口縁端部に沈線が一重廻る。底

部は内外面とも回転ケズリで三又トチンの目跡がある。内面のケズリは同心円状におこなわれ、段がついている。

坏(13) 平底で半球状の形状をもつ小型のものである。器高3.0cm、口径8.6cm、底径4.8cm。瓷器。素地は赤褐色で、全体にやや茶がかった緑色釉をかける。

胴部外面上半は回転ナデで、下半部は回転ケズリである。口縁端部はわずかに肥厚する。底部は外面がやや突出し、回転ナデと静止ナデをおこなっている。回転内面は円形のケズリをおこない、段がついている。外面は三又トチンの目跡が最外部に付いている。

坏(14) 平底で半球状の形状をもつ小型のものである。器高2.8cm、口径8.6cm、底径4.8cm。瓷器。素地は赤褐色で、全体にやや茶がかった緑色釉をかける。

胴部外面上半は回転ナデで、下半部は回転ケズリである。底部は内外面とも回転ケズリをおこなう。外面はわずかに回転糸切痕跡を残し、三又トチンの目跡を最外部に残す。内面のケズリは同心円状におこなわれ、段がついている。

坏(15) 平底で半球状の形状をもつ小型のものである。器高3.1cm、口径8.4cm、底部4.0cm。瓷器。素地は赤褐色で、全体にやや茶がかった赤褐釉をかける。

胴部外面上半は回転ナデで、下半部は回転ケズリである。口縁端部に沈線が一重廻る。底部の外面は回転ケズリで三又トチンの目跡がある。内面は回転ナデをおこなう。

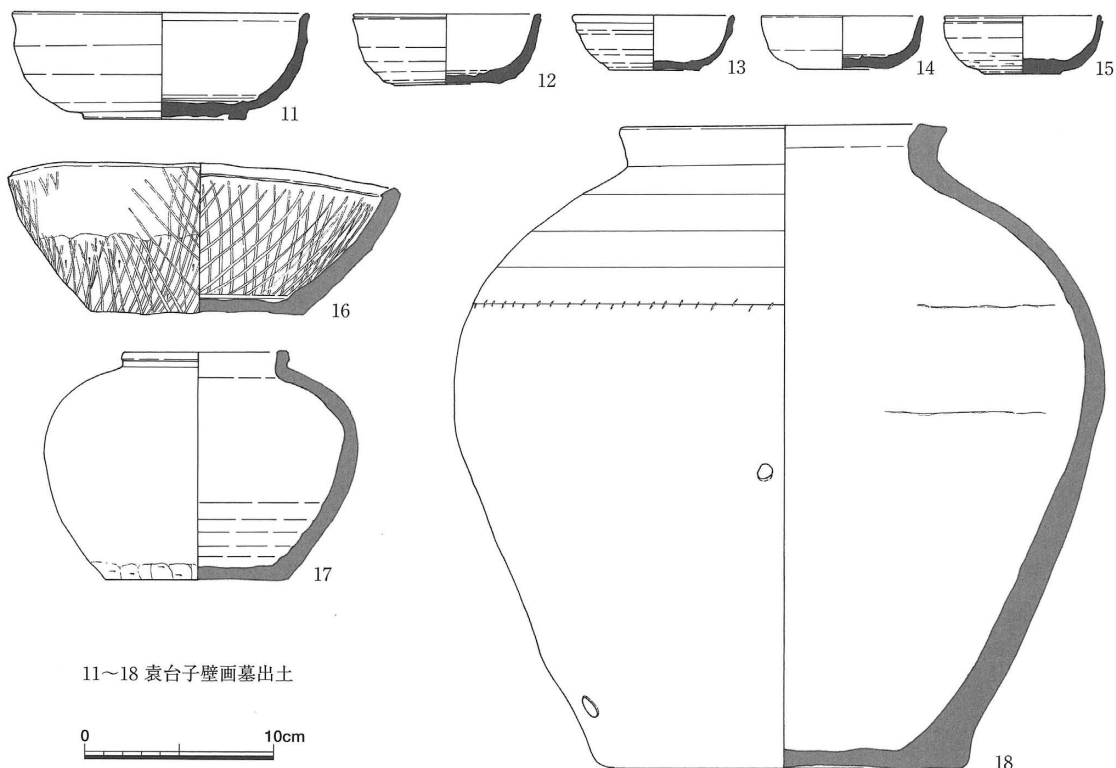


図2 鮮卑墓出土土器(2) s=1/4、18は1/8

鉢(16) 平面形状が水滴状を呈し、片口を意識していると考え。器高8.1cm、口径20.6cm、底径11.2cm。瓦質。暗灰色。

胴部外面は上半を回転ナデ、下半部は上から下へ縦方向の静止ケズリをおこなう。内面は回転ナデ。口縁部は面取り上に回転ナデを施し、内面にわずかに肥厚させる。底部外面は未調整で方形の回転板の圧痕が残る。これらの成形、調整後、水滴状に周囲を加圧して変形させたと考えられる。続いて、内外面ともに太い格子状暗文を施文する。

短頸壺(17) 器高12.1cm、口径8.8cm、底径9.6cm。瓦質。暗灰色

胴部内外面ともに回転ナデをおこない、外面最下部に面取り上に横方向の静止ケズリをおこなう。口縁部は肥厚させる。底部外面は静止糸切痕が残し、切り離し後未調整である。内部には獣骨を納めていた。

甕(18) 大型のもの。器高34.2cm、口径17.3cm、底径19.8cm。瓦質。暗灰色。

胴部は内外面とも回転ナデをおこなう。内面には輪積痕跡を一部に残す。肩部以上に全周する4条の沈線を廻らせ、最下段の沈線にはヘラ状の工具による刺突をおこなう。底部は未調整で、回転台の方形の圧痕を残す。焼成後に2箇所円形の穿孔がおこなわれている。

3-7 倉糧窖出土土器(図3-19~21、図版20-4：孫・李1994)

長頸壺(19) 口縁部を欠失する。残高10.4cm、底径8.0cm。瓦質。黒灰色。

胴部は内外面ともに回転ナデで、外面最下部は面取り上に横方向の静止ケズリをおこなう。底部外面は一方向に静止ケズリをおこなうが、わずかに方形の圧痕を残す。

長頸壺(20) 口縁部を欠失する。残高11.9cm、底径7.6cm。瓦質。黒灰色。

胴部は内外面ともに回転ナデである。内面にはコテ状の工具が当たった痕跡が上半部と下半部の2箇所に見られる。肩部に2条沈線を廻らせる。底部外面は不整方向のナデをおこなうが、最外周は回転ケズリをおこなう。胴部上半部に太い縦位単線暗文を施文し、以下に太い格子状暗文を丁寧に施している。

長頸壺(21) 口縁部を欠失する。残高15.2cm、底径7.6cm。瓦質。黒灰色。

胴部は内外面ともに回転ナデである。肩部に2条沈線を廻らせる。底部外面は不整方向のナデをおこなうが、最外周は回転ケズリをおこなう。沈線より上に太い格子状暗文を施している。

3-8 李廬墓出土土器(図3-22・23、図版21-1：辛・魯・呉1995)

長頸壺(22) 器高23.7cm、口径14.0cm、底径9.8cm。瓦質。黒灰色。

口縁部を肥厚させている。口縁部及び胴部内面に回転ナデをおこなう。胴外面最下部は横方向の回転ケズリをおこなった後、回転ナデで整えている。内面は上半部全体と下半部の一部に輪積痕跡と指頭圧痕が残存する。底部外面は未調整で、方形の回転板の圧痕が残存する。

胴上半部以下に綾杉文状の印文を装飾的に施し、その後上半部は文様を擦り消し、3条の沈線を全周させる。下半部は文様を残すが、その間を擦り消している。沈線より上、頸部にかけて上から下へ太い扇状暗文を施文する。

鉢(23) 器高7.5cm、口径18.2cm、底径9.2cm。赤焼土器。赤褐色。

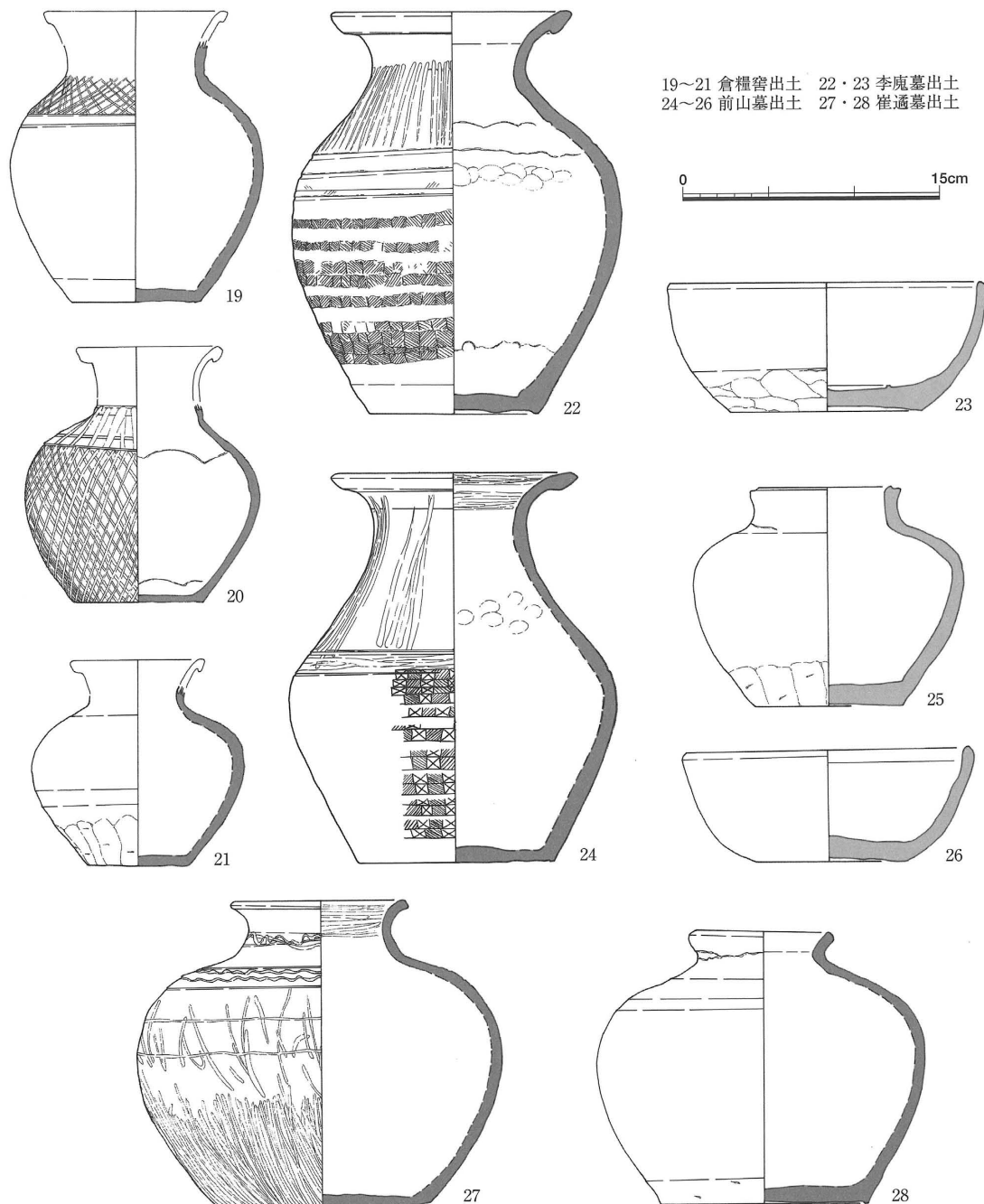


図3 鮮卑墓出土土器(3) s=1/4

平底で半球状の形状を持つ。胴部は内外面ともに回転ナデをおこなうが、外面下半部は静止ケズリを残す。底部の外面は回転糸切後未調整である。見込みに同心円状の突出部を回転ケズリにより削りだす。

3-9 前山墓出土土器(図 3-24~26、図版16-4：魯・辛1998)

壺(24) 器高22.7cm、口径14.3cm、底径11.4cm。瓦質。黒灰色。

口縁部を肥厚させている。口縁部及び胴部内面に回転ナデをおこなう。胴外面最下部は横方向の回転ケズリをおこなった後、回転ナデで整えている。内面は上半部に指頭圧痕が残存する。底部外面は未調整で、方形の回転板の圧痕が残存する。

胴上半部は2条の沈線を全周させ、その間を横方向のミガキをおこなう。沈線上部から頸部にかけては太い縦位複線暗文を施文する。胴下半部はX字状と綾杉状の文様を組み合わせた装飾を施し、その間を擦り消している。

壺(25) 器高12.8cm、口径8.7cm、底径8.6cm。赤焼土器。赤褐色。

垂直に立ち上がる口縁部と肩の張った胴部を持つ。胴部は内外面ともに回転ナデをおこない、外面最下部は面取り上に横方向の静止ケズリをおこなう。口縁端部は強いナデ(あるいはその前に回転ケズリか?)による段がつけられている。頸部外面には輪積痕跡が残存する。底部外面は回転糸切後未調整である。

鉢(26) 器高6.6cm、口径17.0cm、底径8.9cm。赤焼土器。赤褐色。

平底で半球状の形状を持つ。胴部は内外面ともに回転ナデをおこなう。口縁部内面には沈線状の工具痕が一重廻る。底部の外面は回転糸切後未調整である。全体的に器壁が厚く、重量が重い

3-10 崔遙墓出土土器(図 3-27・28、図版21-2：陳・李1982)

短頸壺(27) 器高17.8cm、口径10.8cm、底径12.5cm。瓦質。黒灰色。

外反する口縁と肩の張った胴部を持つ。胴部外面は回転ナデをおこなう。内面の詳細は観察できなかった。最下部は回転ケズリの可能性が高いが、ミガキ調整のため明瞭ではない。頸部は不整な波状文を施文した後、横方向のミガキをおこなう。胴部上半は2条の沈線を全周させた間に、2条の沈線による波状文を施文する。沈線以下は基本的には下から上へのミガキをおこなう。特に下半部は密におこなうが、方向や順序に一貫性はない。底部外面は粗いナデをおこなう。回転台の圧痕などは観察できなかった。

短頸壺(28) 器高16.0cm、口径8.5cm、底径12.1cm。瓦質。灰色。

外反する口縁と肩の張った胴部を持つ。胴部外面は回転ナデをおこなう。内面の詳細は観察できなかった。底部の外面は未調整である。

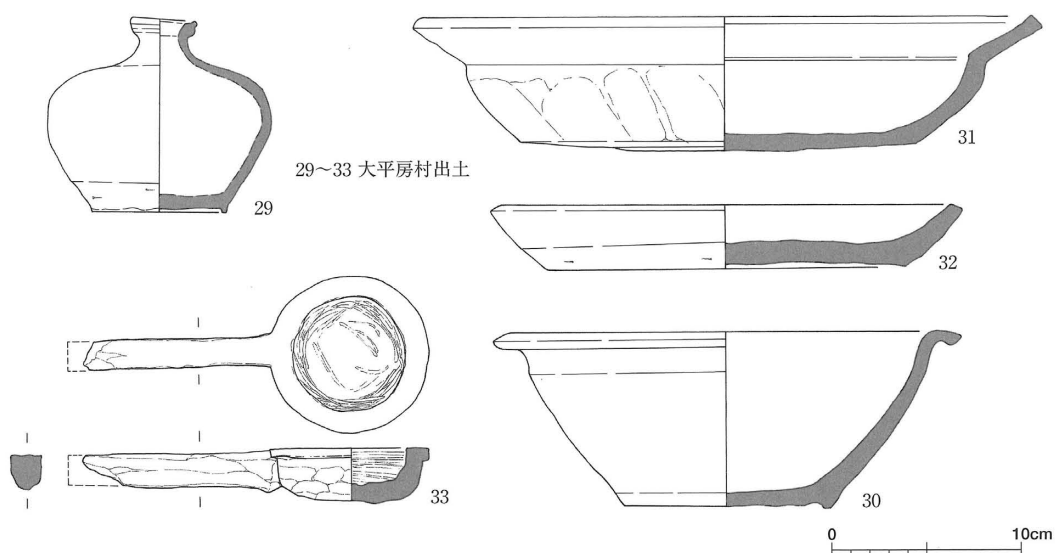


図4 鮮卑墓出土土器(4) s=1/4

3-11 大平房村出土土器(図4-29~33、図版21-3:徐・孫1985)

小口壺(29) 器高10.4cm、口径3.5cm、底径7.2cm。瓦質。暗灰色。

胴部外面は回転ナデをおこない、最下部には回転ケズリをおこなう。内面の詳細は観察できなかった。口縁部は肥厚させており、上面を面取り状に強くナデをおこなっている。底部は外面未調整と思われるが、最外周に断面方形の高台状の突出部が廻る。

鉢(30) 器高9.3cm、口径24.7cm、底径10.9cm。瓦質。暗灰色。

外反する口縁部を持つ。口縁部、胴部ともに回転ナデをおこなう。口縁部は水平よりやや下がり気味に屈曲させている。底部外面は最外周を少し残しながら強い回転ナデを同心円状にめぐらせて、高台状の突出部をつくる。それより内部は未調整で、一部に不整のナデがおこなわれる。

盤(31) 器高7.1cm、口径33.3cm、底径21.0cm。瓦質。暗灰色。

明瞭に屈曲して外方へ延びる口縁部を持つ。口縁部内外面および胴部・底部内面は回転ナデをおこない、胴部外面下半と底部外面外周は面取り状の静止ケズリをおこなう。底部外面中央は方形の回転台の圧痕を残している。

皿(32) 器高3.5cm、口径25.0cm、底径19.0cm。瓦質。暗灰色。

胴部外面上半および内面は回転ナデ、外面下半に回転ケズリをおこなう。底部は未調整で、下駄歯状の回転台の圧痕を残す。

熨斗(33) 残長18.3cm。瓦質。暗灰色。

皿部は外面横方向の静止ケズリを段の下部におこなう他は不整ナデ、口縁部はミガキをおこなう。内面はミガキをおこなう。柄部は面取り状にケズリをおこない、その後ナデ。なお、皿部には被熱痕跡などは認められない。明器であろう。

4 遼西地域における鮮卑系土器の製作技法

以上、観察した資料を中心に土器の製作技法についていくつかまとめてみたい。もっとも、これは観察できた墳墓における傾向であり、生活における什器の実態と同一であるのかは今後関連遺跡の調査で明らかにされることを期待したい。

4-1 器形と成形

罐は、軟質土器にみられ、有軸回転台を用いずに製作がおこなわれている。長頸壺は当該期の墳墓出土資料の主体を占める。瓦質土器である。胴部の中ほどで径が最大になり、口縁部へ緩やかに撫肩のものと、胴部の中程よりやや上方に最大径の来る肩部がやや張る丸肩のものがある。ただし、この差は明瞭に2分されるものではなく、その間で様々な形状を有している。これらは有軸回転台を用いて製作される。内面に粘土紐の輪積痕や指頭圧痕を残す個体も多く、粘土紐巻上げによって成形される。

短頸壺の内、瓦質土器は短い口縁部が直立するか、あるいはやや外方に開き気味になるものと、やや長めの口縁部をもち、水平近くまで外反するものが存在する。胴部は胴部最大径と底部径の差が少なく、筒状になるものと、差があり球状になるものがある。赤焼土器は肩の張り、口縁部が直立する形態が存在する。瓷器にも同様の形態がある。

4-2 回転台からの切り離し

轆轤を用いる土器、特に瓦質土器は、多くが底部に方形あるいは二条、四条の線状の回転台の圧痕を残しているものが多い(図版22-5)。西弘海氏が指摘している通り、有軸回転台の軸と回転板、あるいは回転板と亀板の固定装置の痕跡と考えることができる(西1986)。

また、西氏は底部の外周が突線状に飛び出している痕跡を挙げ、痕跡がみられる須恵器鉢の底部の観察から、体部の成形後に動かさずにそのままの状態底部の外周の粘土をかき取って成形した結果と指摘している(西1986)。白井克也氏は古新羅土器を対象に更に詳細な検討を進め、この痕跡は未分離腰部ケズリと関連し、回転台からの切り離しに関連するものと指摘し、阿部義平氏の「板起こし技法」(阿部1971)によるものと結論付けた(白井1997)。

今回観察した土器の中にも両氏の指摘にあげられているものと同様の痕跡が認められる資料が多く存在し、実資料の観察によっても両氏の見解を否定する要素は確認できなかった。有軸回転台を使用して製作されたと考える観察資料の胴部最下部にはいずれもケズリがおこなわれており、この中に未分離腰部ケズリと判断されるものも存在する。ただし、胴部外面下半部を接地部から胴部中央方向へ縦方向の静止ケズリがおこなわれる資料も多く、これらは回転台からの取り外し後に加えておこなわれたものであろう。

糸による切り離しは李廐墓、前山墓の赤焼土器にみられる(図版22-6)。鉢、壺ともに回転

糸切痕跡を残している。両墳墓は共に錦州地域に所在しており、この技術が地域性を有するものであるのか、赤焼土器の製作に一般的なものであるのかは類例を蓄積して更に検討を進める必要がある。

4-3 施文部位と傾向

施文される部分は全体、肩部、胴部に分かれる。肩部の文様は単線を施すものが細線、太線共に存在する。扇状に上部で複数の線を収束させるもの、格子状になるものは太線のもののみ確認している。

胴部は横方向あるいは格子状に細線を施すもの、縦方向に単線や格子状に太線を施すものが存在する。

胴部に印文をつけるものは、李廐墓、前山墓に存在する。これも現在では地域差をもつ可能性があるが、喇嘛洞ⅡM363出土の短頸壺等、大凌河流域にも存在が知られており、今後の類例の増加を待ちたい。

暗文、およびミガキは、乾燥が進行した段階でおこなわれるものであり、観察資料においても、沈線による装飾の後、完成直前におこなわれている。多くの資料が底部から口縁部の方向におこなわれている。施文のタイミングや作業体勢を考える上で、重要な情報となる。

長頸壺には口縁部と胴部の境に突帯をめぐらせるものが存在する。主に丸肩の胴部をもつものに多く見られる特徴である。

肩部に沈線による波状文をもつものは、主に短頸壺である。この場合、並行する横方向の沈線で区画された中に施されるものが多い。長頸壺においても、肩部の単線暗文と胴部の格子状暗文の間に横方向の沈線による区画をおこない、波状文を施すものがある。

5 出土土器の年代

対象とする時期の墳墓出土土器の内、観察したものは一部であり、土器編年を構築するには不十分である。限界はあるが、年代比定の根拠として使用が可能な資料をもとに、暫定的な土器の年代観についてまとめてみることにする。

埋葬者の死没年代や墳墓造営年代の明らかな資料としては、資料として報告した324年の李廐墓、395年の崔遜墓に加え、415年の馮素弗墓(黎1973)、468年の張略墓(張・万・張1995)があげられる。

また、袁台子壁画墓について田立坤氏は他の墳墓との比較検討を進め、その年代を4世紀中葉とした。更に、残存していた「二月己」、「背万」、「墓奠」の文字に注目し、「二月己」の記載から、該当する年代の候補を、①335年 咸康元年二月己亥朔、②354年 永和十年二月己卯朔、③366年 太和元年二月己巳朔、とし、壁画墓が朝陽の近郊に所在することから、

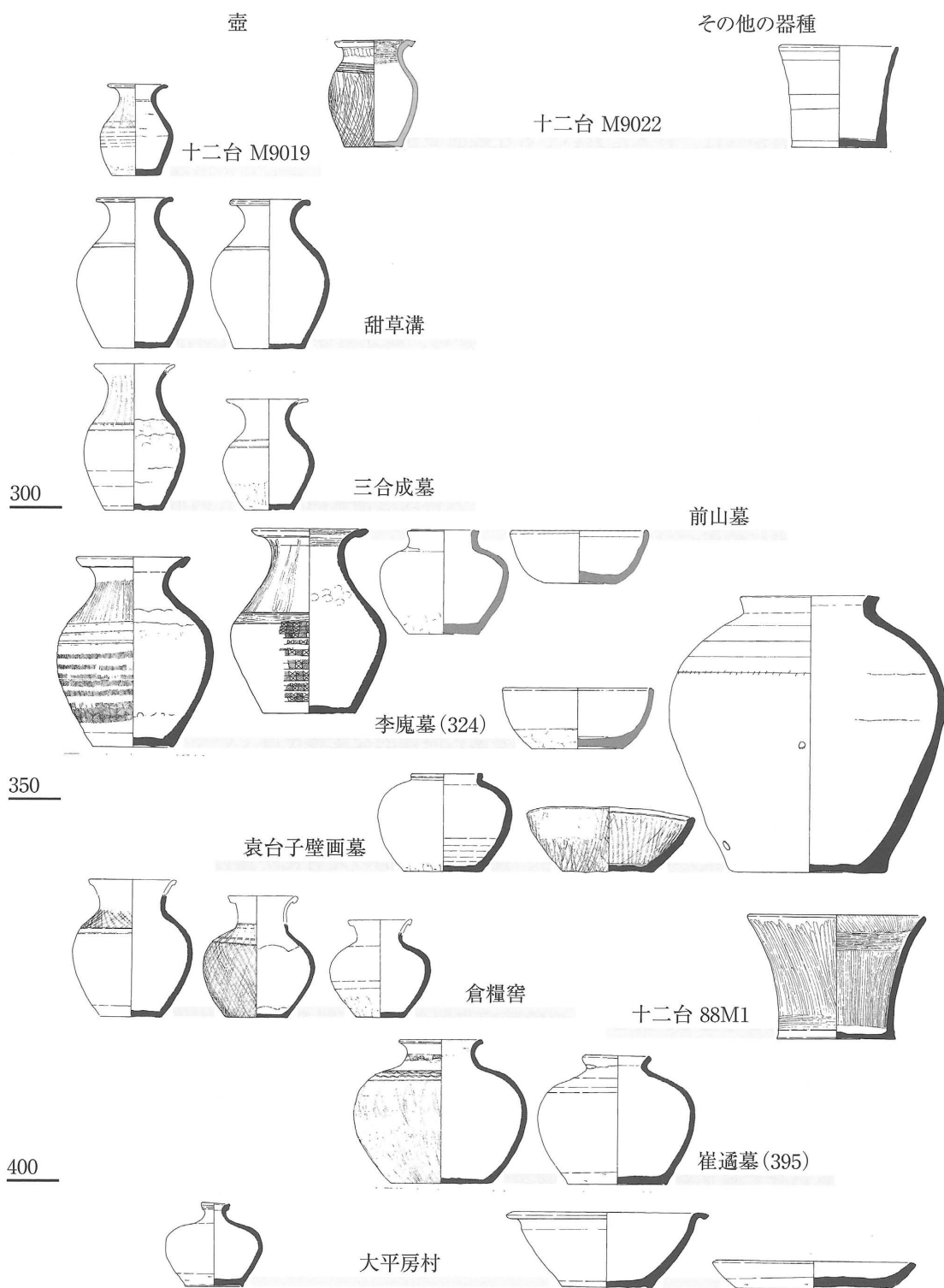


図5 鮮卑墓出土土器の流れ(s=1/8)

342年の竜城への遷都以後として、354年を最有力とし、366年の可能性も排除できないと指摘している(田2002)。いずれを採用するにせよ、壁画墓の年代は4世紀後半に属すると考えることが、現状ではもっとも蓋然性が高いと考える。

考古資料の検討からは、日本においても比較研究が進められている(例えば穴沢・馬目1973、穴沢・馬目1984)。これらは主に馬具を中心とした研究を軸としており、広域における年代の併行関係を知る上で有効であると考ええる。論者はこれらの副葬品について論ずる力量はない為、近年の研究動向として桃崎祐輔氏による馬具の研究(桃崎1999)と藤井康隆氏による帯金具の研究(藤井2003)の成果を参考にしたい。

両氏とも、十二台営子88M1出土の鐙の検討から、河北省安陽孝民屯M154墓(孫1983)と近似するものとされている。この安陽孝民屯M154墓は前燕が中原へ進出し、安陽を攻略した352年、鄴城への遷都と帰葬停止から滅亡にかけての357～370年の間とされ、4世紀の後半にあたると考えている。

また、桃崎氏は倉糧窖墓出土の鑣轡の立間を大韓民国福泉洞38号墳と同形とし、共伴遺物を4世紀後半～末に位置づける。

これらの資料を軸に配列し、土器の時間的な変化をまとめて図を作成した(図5)。

6 出土土器の変遷

蛇足になるが、最後に土器にみられる各要素の時間的な変遷をみていくことにしたい。

まずは、軟質土器の罐および撫肩の胴部を持つ瓦質土器の長頸壺が古相に位置づけられる。これらの土器は3世紀末～4世紀初頭に位置づけられる。

次の段階には罐は組成から外れていき、長頸壺も胴部の丸肩化が進行する。縦位複線暗文や扇状暗文が盛行するのもこの時期であろう。ただ、この文様自体は古くはイヴォルガ遺跡出土資料等の匈奴遺跡から出土した壺に見られる沈線による表現(臼杵2004)に存在し、より広範囲の空間、時間幅での検討を必要とする。今回は実測できなかったが、筒型の長い胴部をもつ壺も同時期と考える。また、この段階で瓷器や金属容器の供膳具が副葬品中に加わり、また赤焼土器の碗や短頸壺が出現することは注目に値する。4世紀前葉から中葉にかけての時期であろう。

続いて瓦質土器の長頸壺が球胴化を達成する。量的にはこの段階以降、減少するようである。これにあわせて暗文を持つものも減少する傾向にあるようだが、馮素弗墓出土の短頸壺の肩部には太線の格子状暗文を見ることができ、無くなるわけではない。4世紀後半の時期であろう。

5世紀には、瓦質土器においても供膳具の存在を見ることができる。この器種の多様化は瓷器、金属容器の搬入、あるいはその影響を受けた赤焼土器の搬入や製作の開始を契機とし、

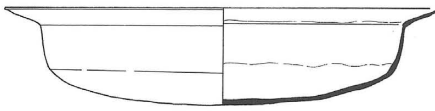


図6 袁台子出土青銅製盤 s=1/4

進展してきたものと思われる。大平房村出土の口縁部が明瞭に屈曲する盤は、袁台子壁画墓出土の青銅盤(図6)と形状が近似しており、これらの金属容器の模倣によるものであろう。後燕の段階までの副葬品における供膳形態の容器は金属器や搬入された瓷器であり、瓦質土器が

組成に供膳形態を加えるようになることは組成上の大きな変化と考える。この頃、後燕から政權を受け継いだ北燕の馮氏については鮮卑化した漢人であるという説が主流であるが、近年、出自が鮮卑であった可能性が指摘され、急激な漢化が図られた可能性もある(内田2005)。瓦質土器にみられるこの組成の変化の背景として、これらの動きを想定することもできよう。

製作技法の点からは瓦質土器は基本的に有軸回転台を使用し、底部は未調整で回転台の痕跡を残している。4世紀前葉にみられる赤焼土器は回転糸切技法により切り離しをおこなうが、赤焼土器の出現や器種の多様化の達成といった変化があるにもかかわらず、瓦質土器は糸切技法への転換は稀で、基本的にこの手法を用いている。焼成技術と共に、製作技術についても両者を生産した工人が独自の伝統を保っていたことを示すものである。

製作技法の特徴を技術系譜論の中に合理化してしまうか、あるいは土器製作技法の法則性の発露とみなすか、という白井氏の指摘を考慮する必要があるが(白井1997)、「板起こし技法」と称され、朝鮮半島や日本列島における土器製作にも確認できるこれらの製作技法が遅くとも4世紀には遼西地方において多く認めることができるという事実は無視できない。今後、東アジアの窯業生産の展開を考える上で、隣接する遼東地方の土器や楽浪土器・高句麗土器を含め、更に検討を進める必要があるだろう。

また、関連が指摘されている匈奴の土器生産との系譜関係(白杵2004)といった課題にも、より研究を深化させていくことを通じて、理解を深めていく必要がある。今後の課題は多い。

7 おわりに

冗長になったが、資料観察とわずかながら検討をおこなった。もっとも、観察できた資料はごく一部であり、含む問題も多いと思われる。諸賢の御叱正を頂ければ幸いである。共同研究参加に際しては遼寧省文物考古研究所、朝陽市博物館、奈良文化財研究所をはじめとする多くの機関、研究者のお世話になった。田立坤氏には出土遺物に関する詳細な情報と年代観を、桃崎祐輔氏には当該期の墳墓出土資料の年代観について丁寧な御教示を頂いた。論者の不勉強の為に有益な御教示を活かし切れていないが、ここに記して謝意を示したい。

参考文献

陳大為 1960「遼寧北票房身村晋墓発掘簡報」『考古』1960年第1期 中国社会科学院考古研究所

- 阿部義平 1971「ロクロ技術の復元」『考古学研究』第18巻第2号 考古学研究会
- 黎瑤渤 1973「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」『文物』1973年第3期 文物出版社
- 穴沢咏光・馬目順一 1973「北燕馮素弗墓の提起する問題」『月刊考古学ジャーナル』85 ニュー・サイエンス社
- 宿白 1977「東北、内モンゴルの鮮卑遺跡」『文物』1977年第5期 文物出版社
- 陳大為・李宇峰 1982「遼寧朝陽後燕崔暹墓の發現」『考古』1982年第3期 中国社会科学院考古研究所
- 孫秉根 1983「安陽孝民屯晋墓發掘報告」『考古』1983年第6期 中国社会科学院考古研究所
- 李慶發 1984「朝陽袁台子東晋壁画墓」『文物』1984年第6期 文物出版社
- 穴沢咏光・馬目順一 1984a・b「安陽孝民屯晋墓の提起する問題(Ⅰ)(Ⅱ)」『月刊考古学ジャーナル』227・228 ニュー・サイエンス社
- 徐基・孫国平 1985「遼寧朝陽發現北燕、北魏墓」『考古』1985年第10期 中国社会科学院考古研究所
- 西弘海 1986「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』 真陽社
- 李宇峰 1986「遼寧朝陽西晋十六国時期 墓葬清理簡報」『北方文物』1986年第3期 『北方文物』郵購部
- 岡崎文夫 1989『魏晋南北朝通史内編』 東洋文庫506 平凡社
- 田立坤 1991「三燕文化遺存の初步研究」『遼海文物學刊』1991年第1期 遼寧省博物館・遼寧省文物考古研究所
- 孫国平・李智 1994「遼寧北票倉糧窖鮮卑墓」『文物』1994年第11期 文物出版社
- 田立坤 1994「朝陽前燕奉車都尉墓」『文物』1994年第11期 文物出版社
- 徐秉琨 1995『鮮卑・三国・古墳－中国朝鮮日本古代の文化交流』 遼寧古籍出版社
- 張克挙・万欣・張洪波 1995「朝陽市發現的几座北魏墓」『遼海文物學刊』1995年第1期 遼寧省博物館・遼寧省文物考古研究所
- 辛癸・魯宝林・吳鵬 1995「錦州前燕李廆墓清理簡報」『文物』1995年第6期 文物出版社
- 礪波護・武田幸男 1997『世界の歴史6・隋唐帝国と古代朝鮮』 中央公論社
- 白井克也 1997「九州大学考古学研究室所蔵古新羅土器Ⅱ」『古文化談叢』38 九州古文化研究会
- 張克挙・田立坤・孫国平 1997「朝陽十二台郷磚廠88M1發掘簡報」『文物』1997年第11期 文物出版社
- 王成生・万欣・張洪波 1997「遼寧朝陽田草溝晋墓」『文物』1997年第11期 文物出版社
- 尚曉波 1997「朝陽王子墳山墓群1987、1990年度考古發掘的主要收穫」『文物』1997年第11期 文物出版社
- 于俊玉 1997「朝陽三合成出土的前燕文物」『文物』1997年第11期 文物出版社
- 魯宝林・辛癸 1998「遼寧錦州市前山十六国時期墓葬的清理」『考古』1998年第1期 中国社会科学院考古研究所
- 桃崎祐輔 1999「日本列島における騎馬文化の受容と拡散」『第46回埋藏文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』 埋藏文化財研究会
- 田立坤 2002「袁台子壁画墓的再認識」『文物』2002年第9期 文物出版社
- 藤井康隆 2003「三燕における帶金具の新例をめぐって」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2 立命館大学考古学論集刊行会
- 白杵勲 2004『鉄器時代の東北アジア』 同成社
- 内田昌功 2005「北燕馮氏の出自と『燕志』、『魏書』」『古代文化』第57巻第8号 古代学協会